王墓にみるエジプト初期国家の王権

中野 智章 *

Tomoaki Nakano*

1 はじめに

本日は「王墓にみるエジプト初期国家の王権」というタイトルで、エジプトで最も古い王たちについて王の墓からどういったことがわかるのか、あるいはどのような研究の可能性があるのかということを、自身の問題意識や、拙いこれまでの研究を振り返りながらご紹介させて頂こうと考えております。

さてこれはグーグル・アースという衛星画像を用いたソフトで、エジプト、イタリア、ギリシャ、シリア、パレスチナあたりを俯瞰したものです。冒頭にこの写真を持ってきた理由は、エジプト学というと、どうしてもエジプトの中で物事をとらえがちですが、実際には本当にすぐ近い位置、例えば目の前にはクレタ島があり、シリア、パレスチナは陸続きであり、こうした諸地域との関係は研究が進むほどわかってくる面がたくさんありますし、研究の対象もこれからさらに増えてくると思います。例えば、以前はよく知られていなかったデルタ地帯の調査がこの２０年ほどの間に大きく進んだことで、対外関係についての認識がかなり変わってきている面もありますので、そういった今後の可能性という視点も大切、ということでまず提示をさせて頂きました。

また、このような写真で見ると一目瞭然ですが、砂漠の部分は白っぽく写っています。ただし、これもある意味で気をつけなければいけないところがあり、今とはこうした砂漠の広がりも随分と変わっていた可能性があります。必ずしも、今見ている風景が古代でも一緒だったとは言えない、ということです。この点もいまから数千年前の文化や社会を考える際には大切ではないかと感じます。

* 中部大学国際関係学部 (College of International Studies, Chubu University, Japan)

2　エジプトの初期国家はどのように誕生したか

まずはエジプトの初期国家とタイトルに記しましたが、これは前3100年から3000年ごろに登場したと考えられています。日本で言うと縄文時代の中期あたりです。この時期にエジプトでは最初の統一王朝が誕生し、そこから国家の形が整っていったおよそ300年から400年ほどの期間を初期王朝時代と呼んでいます（図1）。

ただし、この初期王朝時代や古王国時代、中王国時代や新王国時代といった名称は、現代の研究者がそのように呼び習わしているものに過ぎません。古代の歴史家は王のグループ、例えば出身地や首都、家系といったつながりをもとにした王たちのまとまりを「王朝」という概念で、捉えていました。今回、私がお話しする時代はその最初のあたりですので、前3000年ごろの第1王朝の話と考えて頂ければ宜しいかと思います。

さて最初に国土を統一した王はメネスであることが、前3世紀のエジプト人神官マネトの著作で知られていますが、これはトリノ博物館に所蔵されている王名パピルスや、アビドスのセティ1世葬祭殿（第19王朝）の壁面に彫られた王名表にあり、前5世紀ギリシアの歴史家ヘロドトスの『歴史』にも登場するメニ（ミン）と同一人物であると考えられています。ただしそのメネスが誰であるのか、あるいは果たして実在の人物であったのかについては長らく議論が続いており、結論は出ていません。最近では、ドイツ隊が中部エジプトのアビドス墓地から第1王朝の名前が連続して記されている封泥、すなわち土器に蓋として用いた泥に円筒印章を転がして印を付けたもの、を発見し、その最初に記されていた王がナルメルであったことから、ナルメルがメネスであるとの見方があります。そのナルメルに続いてはアハ、ジェル、ジェト、デン、アネジブ、セメルケト、カアという7人の王が確認されており、ごく短期間の王の存在を唱える研究者もいるものの、第1王朝には計8名の王がいたと言われています。

その第1王朝の首都は、現在のサッカラ遺跡から見下ろすことができるメンフィスに第2代のアハ王によって設けられたことが伝承で知られていますが、堆積層が厚いこともあり、具体的な遺構は確認されていません（図2）。エジプトでは、ナイル川は南から北の地中海へ向かって流れていますが、その南部、すなわちナイル川の上流に当たる上エジプトで原王国というべき政体がまず登場し、そこから北部の下エジプトへ進出していったと考えられています。その進出が武力によるものだったか否かに関しては議論がありますが、少なくとも考古学的に武器や抗争の痕跡が見られるわけではありません。西部デルタ地帯にはドイツ隊が調査しているブト（テル・エル＝ファライーン）という有名な遺跡がありますが、発掘をして地層を順番に下げていくと、第1王朝の直前とされるナカーダIII期にかけて上エジプトの土器などが広がりを見せることが指摘されており、カイザーは他の遺跡にも見られるこの種の現象にナカーダ文化の拡大が見られるとしました【Kaiser 1990】。しかしケーラーは、この一様なナカーダ文化の拡大に地域差の観点から疑問を呈しており【Köhler 2008b】、デルタ地帯のさらなる調査によって今後この王朝開始直前の様相は見かたが変わってくるものと思われます。

いまナカーダIII期と申し上げましたが、この俗に「先王朝時代」と呼ばれている時期に関

しては、土器の移り変わりや銅を用いた金属製品の導入、化粧用の、石で顔料をすりつぶしたパレットの副葬、といった物質文化の変遷に、墓の形状や構築物などの違いを組み合わせ、上エジプトではナカーダという墓地遺跡を基準に幾つかの文化期を設定しています（図 4）。ピートリとカイザーによる先王朝時代の区分は（図 3）、それぞれの研究者が考える段階がナカーダの I 期や II 期という文化期とどう対応し、それが先ほど申し上げた第 1 王朝の王たちにどうつながっていくかを表しています。

その第 1 王朝へと連なる上エジプトと下エジプトとの統一過程に関しては、ケンプが提唱した有名な仮説があります【Kemp 1989: 31-46】。上エジプトにはナカーダやティス、ヒエラコンポリスといった幾つかの有力な町があり、それをまとめたヒエラコンポリスティスの勢力が北部の下エジプトへ進出したという見かたです（図 5）。これは、先ほどご紹介したブトやマアディといった下エジプトの遺跡において、ナカーダの III 期になると南の文化が流入していると見られることから推測されているものです。

ただし、今回はこれからエジプト学に足を踏み入れようという方々に研究の裏側も含めてお話しをさせて頂くということですけれども、こうした仮説は、あくまでこれまでに発見されている遺跡や遺構、遺物で推測される事柄に過ぎません。例えば、人々はナイル川のそばに住んでいましたので、ナイル川の流域が変わり、植物や泥などのもろい素材で作られていた建物は簡単に朽ちてしまい、痕跡を発見することには困難が伴います。エジプトの遺跡と聞くと墓や神殿といったイメージが強い背景には、石で砂漠に築かれた建造物の方が残存状況に優れているという本質的な面があることも確かなわけです。さらにこの仮説に関して言えば、上エジプトの北半分にあたるエジプト中部の遺跡についてはまだ調査が進んでいません。そうした調査が進んでくれば、仮説自体が大いに修正を余儀なくされたり、あるいはまったく異なる説に変更される可能性も大いに出てくるかと思います。ただ一般的に、国家が統一される前 3000 年ごろに近づいてくると、どうやら南にあった文化が北へ進出していったであろう点に関しては、おおよそ研究者が一致するところです。

なお上エジプトの原王国をなしていた町の一つであるティスに関しては、先ほどご紹介した第 1 王朝の首都メンフィスと同様によく知られていません。ただその町の有力者たちは、そのティスに近かったと推測されているアビドス墓地に埋葬されたことが判明しています。ここからは、第 1 王朝の王たちが登場する前の段階、すなわち前 3200 年頃の墓地がドイツ隊によって発掘されており、中でも U-j と名付けられた墓からは、シリア・パレスチナ地域製とされる輸入土器が大量に副葬されていることが確認されました【Dreyer 1998】。これは第 1 王朝が始まる前 3000 年頃よりも 100 年から 200 年近く前の段階で、既にワインや油といったものがそうした土器に収められてエジプトに輸出されていた可能性を示しています。この土器をめぐっては、胎土分析の結果、輸入品ではないという意見も近年出されていますが、私は形態や表面のデザインからみて、輸入品ではないと断言するには時期尚早な気がしています。以前から胎土分析にはさまざまな科学的方法があり、年を経る毎に精度が上がっていくわけですが、いくら精度が上がっても、比較の対象となる土器を形作った胎土のサンプルが多くなければ意

味がありません。また、そのサンプルを実際に古代の人びとが土を取った場所で得ないことには正確なデータは得られませんので、英語で open question という言い回しがありますが、明確な答えはなかなか出せないように感じます。私はこの後でご紹介する第 1 王朝の王墓はどこに存在したかという問題を扱った時に、時期は下りますが、同じシリア・パレスティナ地域から輸入されたと考えられる土器を研究したことがあり【中野 1996b】、その流れからみると、この種の土器はおそらく輸入品だろうと考えています。

他にも、国が統一されていく過程においてはさまざまなものや媒体、概念が整備され、発展していった経緯を見ることができます。例えば、文字の登場です。かつては前 3000 年、遡るにしても前 3100 年ぐらいが初源であろうと考えられていましたが、実際には先ほど申し上げた U-j 号墓において、土器の頸部に値札というわけではありませんが、穴を開けて紐でくくりつけたと思われる象牙製のラベルが発見されており、そこに文字と思われる図像が刻まれたことが前 3200 年頃でも確認されています【Dreyer 1998】。ここにはおそらく数をあらわすのではないかと思われる 1 、 2 、 3 といった線が入り、動物の絵が刻まれています。調査者であるドイツ隊のドライヤーは、それを「西の山」といったようにかなり詳しく読もうとしていますが、単なるマークに過ぎないと見る研究者もおり、必ずしも意見が一致していません。このように、はたしてどの段階をもって文字と呼べばよいのかに関してはなかなか判断に難しい面があるのが現状です。皆さま良くご存じのように、古代エジプトでは象形文字が用いられ、そこでは絵がそのまま文字になる例が多くみられるわけですが、さらに古いものを探してみれば、ニューヨークのメトロポリタン美術館には足がついた赤色の土器が所蔵されています（MET 10.176.113）。有名な遺物ですが、ナカーダ I 期後期から II 期に掛けての紀元前 3900-3650 年頃にまで時代がさかのぼり、後の象形文字で「清める」を意味する「ウワブ」、あるいは「持ってくる」を意味する「イニィ」を示している可能性があります。こうしたものまで文字に含めると、エジプトの文字はさらに初源が古くなるわけです。

その意味で申し上げると、絵に文字が添えられる典型的な碑文のスタイルが登場するのはやはり第 1 王朝に入ってからとなります。例えば現在ルーブル美術館に所蔵されている墓碑には、王を表す隼のホルス神がセレクと称される王名を記した枠の上に彫られており、枠の上半分には蛇王という王の名が記されています（Louvre E. 11007）。またサッカラの第 1 王朝墓地からから唯一発見された石碑には、椅子に腰掛ける高官メリカの脇に、セム神官やエリート層の一員であることを示すイリィ・パァトなどのさまざまな称号が彫られています【Emery 1958: 30; pl. 39】。したがって統一国家ができた頃には、後の時代へと明らかに連なる文字体系がある程度整備されていたと考えて良いと思います。

このように、文字は第 1 王朝の初めの段階でかなり発達していたように考えられますが、美術にも同様の発達を見て取れます。化粧用の顔料をすりつぶすために用いたパレットはナカーダ III 期ぐらいになると大型化し、さまざまな出来事や象徴を表現したと推測されるデザインをまとった一種の記念物となり、神殿に奉納されるなどしました。そこに見えるのは、王朝時代にもみられる王の象徴である隼の神ホルスや、王がライオンの姿で敵をこらしめるなど、

王権の表現ともいうべき意匠の数々です。ここに挙げた例はヒエラコンポリス遺跡から発見されたものですが、動物同士が向かい合う構図は、同時期のメソポタミアに多く見られるものであることから（図 6）、この時期にメソポタミアやエラムなどと何らかの密接な関係があったと考える研究者も以前から存在します【Frankfort 1942（三笠宮 1962）, Wengrow 2006】。

最後に、この先王朝時代から初期王朝時代に掛けて登場した重要なものとして日乾煉瓦を用いた建築物を挙げることができます。エジプトでは、焼成煉瓦ではなく泥にわらなどを混ぜて乾燥させた日乾煉瓦を用いました。それを使って王宮は建てられたでしょうし、墓も造られました。そうした建築はそもそもメソポタミアに起源があると考えられており、壁を支えるために設けた控え壁などの技術はウルクなどの遺跡でも見られるものです。それが海外との交流の中でエジプトにいつの時点で入ったかという点も、この時代を探る重要な鍵の一つとなります。なお私は、エジプトの初期王権を示す「セレク」と呼ばれる王名枠について、上エジプトの象徴であるホルス神と下エジプトの象徴である扶壁建築が合体した意匠であるとの考えを以前に示したことがあります（図 7）【中野 2001】。

もっともその日乾煉瓦の使用に関しては、上エジプトのヒエラコンポリス遺跡において日乾煉瓦を用いた壁が発見され、時代的に紀元前 3200 年頃まで遡ることもあってエジプトの中で独自に発達を遂げたとの見かたも最近出されています。ただ上部の残存状況が必ずしも良好でないことなどもあって、単純に比較するにはまだ材料が乏しいように思われます。壁は世界中の多くの文化で造られるものですので、慎重な見かたが必要でしょう。ブト遺跡など下エジプトのデルタ地帯で発掘される日乾煉瓦壁は基本的に分厚く、２メートル近いものもあります。そうした建築が例えばヒエラコンポリスの建築物とどうつながりがあるのかや、第 1 王朝の墓とどのような関係があるのかは、おそらくこれから研究が進む分野であると思います。なお、この分野に関してはジェフリー・スペンサーという大英博物館の学芸員であった研究者が『古代エジプトの煉瓦建築（Brick Architecture in Ancient Egypt）』という有名な本を 1979 年に出版していますが【Spencer 1979】、そこに用いられている数値は基本的に報告書に記されていたものを採用していますので、誤りも多いとされています。

3　第 1 王朝における王墓の所在

このように、文字や美術、建築といった後の王朝時代において王権と密接に結びつく表象の数々が先王朝時代の末期から第 1 王朝にかけて急速に発展を遂げたと考えられているわけですが、ではその王権のあり方をもっとも象徴していた可能性が高い王墓については、いったいどのようなことが分かっているのでしょうか。

私は名古屋の南山大学に入学してこの分野の勉強を始めたのですが、非常勤でいらしていた信州大学（当時）の屋形禎亮先生にこれを読みなさいとまず示されたのが、『ケンブリッジ古代史（Cambridge Ancient History）』でした【Edwards 1971】。エジプトの初期王朝時代を扱う第 3 版の出版は 1970 年代の前半で、以降新版は出ていないために今となっては古さが

否めませんが、依然として基本的な文献やどのように歴史が分かってきているかを示した重要な本です。ただ、私は高校時代に英語が大の苦手で、大学入試の際にも一番足を引っ張った科目だったために、最初はこの 1 ページを読むのでさえ何時間も掛かる有様でした。当時ご指導を頂いていた重松和男先生には、人名は緑、地名は青、時代は黄色といった具合にマーカーで線を引きながら読みなさいと言われ、辞書を片手に本のコピーを読んだ記憶があります。洋書を読むことは古代のエジプトを研究する上で避けて通れませんが、慣れてくると数時間が 1 時間になり、1 時間が数十分、数十分が 1 分、1 分が‥という具合に段々速くなっていきます。

そんな感じで読み始めたのですが、最初はそれが苦痛で仕方がなく、先王朝時代を読み、初期王朝時代を読んだところでこの第 1 王朝の王墓地に関する項目に出会い、そこに王墓地はまだ所在が確定していない未解決の問題である、と書かれていましたので、学部の卒業論文ではこれをやってみようと考えました。ですので、この後さまざまな時代を諸先生が話して下さいますが、私の場合は中王国時代や新王国時代、ましてや藤井先生がなさっている末期なんてとんでもないということで、最初に出てきたところでテーマを決めたというのが正直なところです。

では未解決問題とはどういうことかと申しますと、エジプトで一番古い、第 1 王朝の王たちは 8 人であったと先ほど申し上げましたが、彼らの墓は、出身地である上エジプトのティスに近いとされるアビドス墓地にのみ存在したのか、あるいはそれとは別に、当時の首都メンフィスの脇にあるサッカラ墓地にもう 1 つの墓を有していたのかという議論が長らく続いていました。

アビドスでは、実際に王墓から墓碑が発見されていますので、王の墓であることは誰もが納得していたのですが、ただエジプトは後の時代になると、例えば中王国時代には宗教上の遺体を納めない空の王墓を造った例があり、それを基にこの第 1 王朝のアビドスで発見された王墓も、王の墓碑は置いてあるけれども実は空の王墓で、それとは別に、当時の首都メンフィスを見下ろす石灰岩台地の縁辺に設けられた、アビドスよりも規模の大きい墓が真の王墓、すなわち王の遺体を埋葬した場所であるという説が出されたわけです。一般的に考えて、王の墓より家来の墓が小さいことはないだろうというのがその主な理由でした。

この点に関して、日本で言うなら邪馬台国論争のようにアメリカやドイツ、イギリスの研究者はアビドスが王墓で、サッカラは当時の役人、特に高官を埋葬した墓との説を採り、一方でフランスやエジプトの研究者はアビドスが宗教上の空の王墓、サッカラが遺体をおさめた真の王墓であるという説を支持する流れが大きく見てあり、いまでもそう考える研究者は少なからず存在しています【Autuori 2002, Stadelmann 2006】。

ではその点が何に影響するかと言いますと、一番は王権のあり方や国の成り立ちの捉えかたに関係します。例えば、国が統一された最初の段階で王たちは出身地である南部のアビドスにしか王墓を築かず、サッカラは新首都であるメンフィスに墓地として面しているわけですが、そこに王たちは埋葬されなかったと見るのか、あるいは当初から王は両地に墓などの葬祭建造物を築いており、国を動かす力は北部のメンフィスでも相当程度確立していた、というように

初期国家の見かたが変わってくるわけです。

ですが、学部卒業論文でこの問題を扱うことになった際には、関連する論文を片っ端から集めて研究史をまとめるのが精一杯でした。いまとは違ってインターネットで情報を得ることはできませんでしたから、大学図書館のレファレンスコーナーからあちこちの大学に複写依頼を出し、指導教員の出身校である東大の考古学研究室からアビドスの報告書を何冊もお借りしたことを覚えています。その結果判明したことは、ロンドン大学のピートリが調査したアビドス墓地、同じ大学のエメリーが調査したサッカラ墓地ともに墓は盗掘や火災の害を甚大に受けており、副葬品の研究は皆無に等しいこと、よって議論の中心は、出土した文字資料や遺構の規模を比較することにほぼ限定されているという研究の状況でした。イギリスのケンプは、アビドスの王墓域から北東に 1km ほど離れた地点で発見されていた長方形の空間を囲む小型墓の列がかつては王の葬祭空間であり、本来は王墓と一体で、両者を加えた規模はサッカラの墓をはるかに上回る、また、サッカラで最大の墓とされる 3505 号墓に付属する「葬祭殿」とされる遺構は、後の古王国時代の私人墓にも見られる祠堂と同様の構築物であるため王墓ではない、との新しい見かたを 60 年代の終わりに提示しましたが【Kemp 1966, 1967】、それも遺構の規模や一箇所しか発見されていない施設の性格が議論の中心で、サッカラに王墓がないことを決定づけるまでには至りませんでした。

その後、私は学部 3 年生の折に来日され、知遇を得たジョン・ベインズ先生の下で学ぶためにイギリスへ留学し、今度はこの問題を実際に自身で解いてみることを目標に研究を始めました。象形文字や歴史、文明や遺跡、遺物といった科目を学ぶ合間に取り組み始めたのですが、幸い、留学先であるオックスフォード大学のアシュモレアン博物館にはちょうどアビドスの王墓地で出土した多くの遺物が展示されていましたので、研究所の図書館から報告書を持ち出し、展示ケースの前に椅子を置いて 1 点 1 点確認していきました。南山大学では考古学を専攻していましたので、ほとんど研究がなされていないことは承知していたものの、まずはやはり気になる遺物から取り組み始めました。

留学先で得たものは多くありますが、いま振り返ってみて一番有難かったのは、それがどこまで実践できているかは別として、研究の方法を学んだことだと考えています。隔週で宗教や言語、歴史や王権など古代エジプト文明に関するさまざまなテーマについて 10 ページほどのエッセイと呼ばれる小論文を書くのですが、その際には、リストに挙げられている基本的な文献を手掛かりにまずこれまでの研究史を振り返った上で、新たな研究の可能性を提示することが求められました。今は教える立場になったので日本と欧米では教育法が異なることを痛感する機会も多いのですが、私が日本で書いていたいわゆるレポートは、関係する本や論文をまとめたものに過ぎず、議論が分かれるような問題があっても、おそらくこちらが良いだろうといった他人の考えに沿った答えしか出すことができていませんでした。ところが、イギリスではそれでは高い評価を得ることができません。正解か否かは別として、人が既にやっていることではなく、新たな研究のアプローチを探ることが要求されます。

そんな研究環境の中でもがきながらこの第 1 王朝の王墓地問題について考え出したアプロー

チは、一般に研究の可能性がないとされてきた遺物であっても、問題の盗掘や火災の被害をそれほど受けていないと考えられるものを扱えばよいのではないか、さらには王墓について探るのであれば、当時エジプトが関係していた周辺地域から一番貴重なものが送られ、副葬された可能性が高いのではないか、というものでした。そして試行錯誤の末に、シリア・パレスティナ地域製の輸入土器を研究対象として選択しました。土器は、もともと焼いて作られたものですから火には強いですし、中に収められたものはワインや油といった液体が中心で、貴石などの豪華な品とは異なり、盗まれる可能性は低く、また破壊されても破片が残る可能性も高いと言えます。加えて、私はアビドスを調査したピートリの報告書をチェックしていた際に、「エーゲ海の土器（Aegean Pottery）」と記されていた土器が【Petrie 1901: pl. LIV】、実際にはシリア・パレスティナ産のもので、アシュモレアン博物館でも展示がなされており、ほとんど未公刊であることを突き止めていましたので、もう一方の主な所蔵先であるロンドン大学にも通い、計150点ほどの土器を集成し、分析しました。

結果としてこれが私の修士論文となったわけですが、判明したのは、輸入土器は大きく2種類に分けることができ、1つは流麗な模様が表面に描かれているもの、もう一つは全体が赤色で磨きが掛けられた土器であり、前者は形態もほぼ同一で香油を入れた可能性が高く、アビドスの王墓からしか出土しないこと、後者は形態もさまざまで調整にもバラエティがあり、内容物も植物の種子や油、ワインとバラバラで、アビドスやサッカラだけでなく地方の大墓からも出土していることでした。そこで前者の彩文土器が王の遺体のそばに供えられた香油容器であったのに対し、後者はエジプトのほぼ支配下にあった地域から、エジプトの王や王族などのエリート層に特産品を入れて輸入された容器であると考えました。すなわち、彩文土器を独占的に有するアビドスが王墓で、サッカラは高官の墓であると結論づけたわけです。研究を始めたのは1991年でしたので、先ほど申し上げた、先王朝時代末のナカーダIII期に属するアビドスのU-j号墓から出土した、数百点のシリア・パレスティナ地域製と考えられる輸入土器の存在はまだ明らかになっていませんでしたが、そうした土器輸入の流れは第1王朝にもつながっていたのではないかと考えています。

ただし、これで第1王朝の王墓地問題が解決したと胸を張って言うことは自身ではできませんでした。どんな研究にも弱点はつきもので、ましてや今から5000年も前のことを扱っているわけですから、当然のことながら研究の対象に選んだ資料がすべて残っていたわけでもありません。この話の冒頭で、古代のエジプトを研究する際には今とは異なる自然環境や周辺地域との関係にも目を配る必要があると申し上げましたが、この一見答えが出たかのように思える輸入土器を用いて王墓地を特定する研究も、王はやはりサッカラにも墓を築いたが、たまたまアビドスの墓にのみ彩文土器を副葬したのだという解釈が成り立たなくもありませんでした。そこで次の博士論文では、問題のサッカラ墓地を研究の対象に絞りました。

これもイギリスで細かく言われたことですが、研究をする際には必ずまず原点に戻ること、どの研究者がどんなことを言っているという前に、資料を扱うのであればできる限り1次資料に基づくことが必要ですし、議論の前提となる根拠がそもそもどこにあるのかを確認する必

要が当然ながらあります。そこで第1王朝の王墓地がどこに存在したかを考える際に、サッカラの墓はアビドスより規模が大きいことが分かっていたわけですが、そもそもサッカラ墓地から発見されているアビドスよりも大きな墓は、報告書で知られているだけでも17基あるわけです。このことを改めて考えてみた際に、もし一部の研究者が主張するように王墓がサッカラに存在したのであれば、第1王朝の王は8人なので、少なくとも17-8の9基の墓は王墓ではなかった可能性がある、だとすれば、墓地内における墓の差異を見出すことができれば王墓の有無を知る手がかりが得られるのではないか、というように研究の方針を立てました。ごくごく単純な発想なのですが、ただ非常に意外なことに、過去の研究史を振り返ってみても、そのように考えながら議論を進めた研究者はそれまでいませんでした。

このお話では、本格的に研究に取り組もうとしている大学院生の方々に向けて話すような感じでと仰せつかっていますので、さして大した研究もしていないのにこんなことを申し上げるのも甚だ失礼かとは存じますが、私は、自分なりの研究の方法論といったものを身につけていく際には、幾つかの段階があるように感じています。学問の基本的な事柄を身につけた上で研究を始める時には、第一にまずさまざまな研究者の議論を読みこみかつ探る中で、研究の幅広さを知る段階があると思います。ついで2番目には、研究の対象を分析、議論していく過程において、有名どころの研究者の誤りに気付いたり、自身のアイデアが他の研究者のアイデアに近いことに気付く時があります。この段階になると、自分のアプローチの仕方が必ずしも間違っていないことを知り、少し自信がついてきます。そして3番目は、それを超えたところで勝負ができないかを考え、実行する段階です。その中で自分の得意技といったものを身につけることができていくのだろうと思います。ただ、私自身は未だあれやこれやと試行錯誤の段階にありますし、今は自らの研究姿勢の問題でもあるのですが、公務多忙を口実にフルに研究に没頭できていない状況にありますので、自信を持ってその境地にあるとは恥ずかしながら言える状況にありません。

さて話を元に戻すと、一つの墓地を分析していく際にはさまざまな面を考察する必要が生じるわけですが、この研究では、第1王朝というおよそ100年から150年という「時間」、そして首都メンフィスを見下ろしていたと思われる石灰岩台地の縁辺に20基近い大型墓が建てられたという面的な「広がり」を主な軸として、墓地の特徴を洗い出そうと考えました。ちなみに、サッカラの墓はこの復元図のような形状をしていたと考えられていて、規模は50x20mといったちょっとしたプールぐらいの大きさがあり、表面には「王宮ファサード」と呼ばれているような、当時の王宮に用いられたとされる建築様式を見出すことができます（図9, 10）。全体は白に塗られ、部分的にへこんだ箇所は「壁龕」と呼ばれて時に赤などの彩色が施されており、墓の周囲には家来の墓と考えられる付属墓が設けられることがあります。

まず私が取り組んだのは、それぞれの墓がどのような順番で、どこに造られたのかを確認することでした（図8）。これは、いま申し上げた「時間」と「広がり」を一つの墓地の中でみていく作業になります。このサッカラ墓地では、調査者によって3357号墓と名付けられた、第2代のアハ王の治世に建造されたとみられる墓を先頭に、当初墓は南へ南へと台地の縁辺

沿いに築かれていきますが、それが第５代のデン王期になると、なぜか最初に造られた3357号墓を飛び越えてその北側に墓を築くようになります。そして第１王朝の末にあたる第８代のカアア王期になると、今度は再び王朝初期に築かれた3357号墓より南に位置する墓の間に、墓の横軸の向きを変えてまで、墓を築く現象がみられます。墓が築かれた台地の縁辺には、さらに南や北にも墓を築くスペースがじゅうぶん空いていたにもかかわらず、わざわざ墓を築く場所を急に変更し、狭い空間をねらって墓を築いたのはいったいなぜだったのでしょうか。

この疑問を解くためについで考察したのは、それぞれの墓の時期を比定する根拠となっている、文字資料の出土状況でした（表1）。各墓からは、土器に蓋をした泥に王名が円筒印章でつけられ、象牙製の小板や銅製品などにも王名が記されていることがあり、その存在を持って墓の建造時期を決めています。ところが、墓によっては複数の王名が含まれている例が幾つかあり、中にはおそらく５０年以上の時期差があると考えられる第８代のカアア王の名が、第４代のジェト王の名前を多数含む墓から出土した事例もあることに気付きました。そしてその墓の築かれた位置は、先ほどお話しした、わざわざ狭い空間をねらって王朝末期の墓が築かれた場所と一致していたのです。

ただこれもまた難しいところで、この調査は今から半世紀近く前に行われたものであるため、その当時としては細かく、どこからどういった土器が何点出土したかといったことは記してあるものの、その具体的な出土状況図は報告書に掲載されていません。また、出土品の取り上げに際して周囲の墓の出土品が混入していた可能性もやはり考える必要があります。そのため、この研究を行った際には調査者の残した日々の調査日誌や、報告書には掲載されていない膨大な写真を再度チェックする作業も行いました。イギリスのエジプト学会にあたるEgypt Exploration Societyは大英博物館のそばに本部を構えていますが、そこには今から100年前の調査の際に残された資料もアーカイブとして整理・保管されています。そのような検討を経て、第１王朝の初期に築かれた3357号墓より南側の墓の中に、王朝末期の王名を含む例が確かに存在することを確認したわけです。

またこの研究では、他にも墓の構造を細かく分析し、墓の外面を構成する壁龕には２つのパターンがあることを確認しました（表2）。王朝初期には作りが複雑だったものがやがて単純化していく傾向があります。そしてそうした一連の流れの中でも、先程来申し上げている3357号墓より南側の墓にはその壁龕が複雑な形を呈するものが圧倒的に多く、また、墓によっては周囲に泥で造った牛の頭を300頭分ぐらい設置し、そこに本物の牛の角を装着した例も存在するのですが、そのような、墓の外面に何らかの装飾を施す例もまた南側の墓に集中することがわかりました。当時のエジプトは物々交換の時代であり、牛はその中でも最も価値の高いものだったので、300頭もの牛を飾るということは、被葬者がそれだけ富裕だったことを示す可能性があります。また、牛は神として崇められることもありました。

このように、たとえ半世紀もしくは１世紀近く前の調査であったにせよ、もう一度資料の状況を細かく探ってみることがこの種の研究では大事なのではないかと感じることが多く、報告書はもちろんですが、そこから落ちてしまっている資料や、遺物そのものをじっくりと観察

することで何かできないかと考えてみたりします。最初に輸入土器の研究をした時も、報告書に出てくる遺物を全部まずはリストアップしてみて、これを使ったらどんな研究の可能性があるかといったことを考えた次第です。その際に、これをやってみたらこれとこれがつながる、ということを絶えず意識しながら進めていくわけですが、最初から偏見が入ってはいけないものの、例えばサッカラの墓に描かれることがある連続菱形の模様は、実はメソポタミアでも粘土製の釘をモザイクのように壁に挿しこむことで表現した例があります。この模様に関しては、やがて王が独占的に用いるようになった文様であることを別に行った研究で明らかにしましたが【中野 2003; Nakano 2000】、これもサッカラ墓地では 3357 号墓より南に造られた墓に集中するという現象が見られます。

つまるところ、あの手この手でいろんなものを見出そうと試みるわけですが、1つの墓地を考える際にそこにどういった人が埋葬されていたのか、そこにはどういう意味があったのか、といった点を土器の出土状況からも考察しました。輸入土器のところで申し上げたように、土器は盗掘や火災に遭ったとしても残存状況が比較的優れているという利点がありますので、副葬品の研究を行う上では、決して豪華な遺物ではありませんが、多くの情報を引き出せる可能性があります。日本の考古学でも、土器から当時の食糧や生業はもちろんのこと、地域間の交流やキメラと呼ばれるような種類の土器が出現することなどが明らかになっています。エジプト学の分野では、文字資料が豊富なためにそういった細かな考古学的研究がどちらかというと軽視される傾向があったように思いますが、今日ではそれも含めた研究の重要性がさらに高まってきていると感じています。

さてこの第1王朝のサッカラ墓地については、報告書の記述のみでなく、大量の未発表資料や写真もチェックした結果、やはり 3357 号墓よりも南に位置するさまざまな特徴を有する墓に、圧倒的多数の土器が副葬された様子を確認することができました。さらにはその土器の形状や出土位置をみてみると、被葬者の供養を行う場所も南の墓に多く設けられることが判明したため、おそらくは 3357 号墓よりも北側に造られた墓に比べ、南側の墓に埋葬された被葬者は何某かの特別な意味を持つ人びとであった可能性が高いと考えました。そこで実際に各墓から出土した人名やそれに伴う称号を再度検討してみると、南には王子や王妃といった王族が埋葬され、北には役人に関する称号が多いことから、高官層が埋葬されたという結論に達しました。すなわち、これまでの議論で王墓か高官墓かといわれていたサッカラ墓地は、実際には王族と高官層をそれぞれ埋葬する2つの墓域から成り立っていたと考えるに至ったのです。

この成果については、昨年学期のまっただ中で猛烈に忙しい中をプラハへ行き、碌に準備もできなかったことを後悔しながら発表をさせて頂きました。欧米の大学で1年が終わる6月は、日本の大学では最も多忙な時期に当たります。そこで頂いたコメントの中には、王族と高官と言っても、この第1王朝の頃にはそれほどの差はないのではないかといった指摘がありました。それはこれまでの見かたから言えば確かにその通りなのですが、それでも、メリカの石碑にあるように「イリィ・パアト」という語で「エリート層の一員（おそらく王族）」を示す例は既にみられますし、それほどの差はないと考えられてきたこれらの人びとに関しても、こうした

研究の成果から実は差があったと考えることができる可能性が見えてきたように自身では考えています。さらに言えば、南と北で被葬者が異なるというここでの見かたが正しいとすれば、それは首都の位置や、続く第２王朝や第３王朝になると登場する階段ピラミッドといった王墓の立地にも深く関係しているのかもしれません。

4　初期国家の王権をどう考えるか

このように、既に知られている資料であっても見直しをすることで新たな情報が得られる可能性があるように考えるわけですが、最後にこうした成果から、初期国家の王権をどのように考えていくことができるのかを今後の研究の可能性も含めてお話ししたいと思います。

一つには、アビドスに王墓があり、サッカラには王族や高官が埋葬されていたと考えられることで、第１王朝の時点ではサッカラに面する首都メンフィスが本格的な首都としてまだ機能していなかった可能性を指摘することができるかと思います。その意味において、王権はまだ全国的に確立したものではなかったと言えるのではないでしょうか。なおここで興味深いのは、いま申し上げたことはこれまでに発見されている資料から考えた場合の、王墓の所在からみた姿ですが、この第１王朝ができた頃から、神を祀る神殿と墓の間には明確な区分があったようです。この時期の事柄を記した資料として、イタリアのパレルモにある博物館に所蔵されている通称「パレルモ・ストーン」と呼ばれる石碑がありますが、そこには、各王の治世にどのような出来事があったかが彫られています【Wilkinson 2000】。そこには王が各地を巡る「ホルスの巡行」と呼ばれる行事、隔年で実施される雄牛の頭数調査、ナイル川の水位記録などが記されているのですが、そうした石碑や、墓から出土する象牙製のラベルには、どこそこの神殿を訪れ、神像を奉納したといった記載がみられます。そこには下エジプトのデルタ地帯に関する記載が多く、王権を確立するためにそうした地域との結びつきを強めていった過程がやはり第１王朝にあったのではないかと推察しています。ただし、この時期の記載は「実際にあった出来事をそのまま記した」というよりは、「実際にあるべきと考えていた出来事を記した」可能性も多分に含まれているため、そのまま史実として受け取ることには注意が必要です。ですが、少なくともそうしたデルタ地帯との結びつきを大切にしていた点は、初期王権の一つの重要な特徴であろうと思います。

また、首都メンフィスの規模や役割については近年議論が盛んになっています。先述したプラハの学会では、長らく、通称「ポーター＆モス」と呼ばれるエジプト中の遺跡やその出土遺物に記された文字資料を網羅した書物のエディターを務めていたオックスフォードのマレックがメンフィスの初源について講演を行いましたし、私の師匠であるベインズは、近著の中で首都メンフィスは土地の景観などを考えた際におそらくそれほど大きいものではなかっただろうという見かたをやはり示しています【Baines 2013: 163】。メンフィスは当初「白い壁」を意味する「イネブ・ヘジュ」と呼ばれていたと考えられていますが、そうした「壁」は先王朝時代の末期から王権と結びつきの深い建造物で、先王朝時代末期のパレットにも良く表現が見ら

れます。第 1 王朝のサッカラ墓地においても、王族を埋葬したと考える南墓域の墓には壁を有する墓が多く含まれています。「壁」は内と外とを分けるボーダーでもあるわけですが、そこにも王権のあり方を考える研究のヒントが隠されているのかもしれません。

さらには、対外関係に関する研究もさらに進展を見せており、デルタ地帯の調査が先の輸入土器の研究に関しても新たな見かたを与えてくれる可能性があります。第 1 王朝初代のナルメル王がパレスティナに侵攻していたであろうことは、彼の名が多くの遺跡で見つかっていることや、エジプト式の土器や建造物が造られたことなどからもよく知られていますが【Wilkinson 1999: 152-155】、それがより古い段階にまで遡るのかといった点も、初期の王権を考える上で重要と思います。

なおこうした研究の状況は、今やインターネットの発達のおかげで日本にいてもかなり知ることができるようになりました。90 年代の初頭までは、現地で情報を入手するか、あるいは国内であれば早稲田大学や中近東文化センター、関西大学や天理大学といった研究機関で学会誌や研究書を読むことでしか得られなかった情報が、今ではどこで誰がどんな講演を行っているか、あるいはどこでどのような展覧会が開催されているか、そして誰がどんな研究を進めているのかといったところまである程度得ることができます。また、かつては研究の中心地とでも言うべきところでのみ閲覧が可能だった書籍に関しても、版権が切れたものはインターネット上で公開されるようになり、入手が容易になりました。

もっとも最新の情報に関してはやはりその種の学会や人づてに知るしかない面があるのは今も昔も変わりなく、この先王朝時代から初期王朝時代に掛けての研究であれば、”Origins” と呼ばれる国際学会が 3 年に一度開催され、最新の調査や研究の成果を知ることができます。これについても、アブストラクトはインターネットで入手することが可能です。それを見ると、例えば工芸の専門化や上エジプトと下エジプトの交流など、その時々の関心が高い話題に沿って集中的に議論がなされている様子が良くわかります。そうした情報からは、現在の研究のトレンドがどこにあるのかを知ることも可能です。

ただ上手くいっているかどうかは別として、私自身が日頃から心掛けていることとしては、そういった研究のトレンドを意識しすぎるとそれに縛られてしまうような気もしますので、この時代を研究する際に最も重要な事柄は何なのか、といった大きなテーマを絶えず意識するようにしています。輸入土器やサッカラ墓地の研究にせよ、他に手がけている研究にしても、これがこの時代を理解する上で非常に大事なのだ、というものを探すよう努める姿勢は、やはり欠かせないのではないでしょうか。もっとも実際に発掘調査を行ってみると、それまでは気付かなかった視点から新たに見えてくることがあるのも事実です。

その意味では、例えばサッカラで調査が進んでいる第 2 王朝のニネチェル王墓の報告書がつい最近刊行されました【Lacher-Raschdorff 2014】。第 2 王朝に入ると、王墓は後半の 2 基を除いてサッカラに建造されます。ここには、その成果を含めて初期王朝時代における墓制の発展に関する詳しい議論がなされていますが、こうした情報を頭に入れながら、これまで欠けていた部分がどうつながってくるのか、そこに新たな研究の可能性はないのか、といったことを

考える姿勢がまた求められます。そしてそうした問題意識を持つことによって、先にご紹介した、半世紀前の調査者が記したフィールドノートの記述もまた新たな見かたで読むことができるわけです。ちなみに、エメリーは几帳面な性格が良く出ていて字もきれいですが、ピートリは悪筆で有名で、私の先生などもお手上げといったことがありました。そうした過去の調査のアーカイブを、これまでとは異なる視点で読み解いていくことも求められていくのだろうと感じます。

最後に、この初期王朝時代を学ぶ上で最も基本的な文献はウィルキンソンが書いた『エジプト初期王朝時代（Early Dynastic Egypt）』です【Wilkinson 1999】。この時代に関する調査や研究の流れを踏まえながら、歴史を概観し、行政や対外関係、王権、葬祭建造物、信仰、都市化、地域といった具合に非常に多くの情報を上手く整理し紹介しています。また、この初期王朝時代の王権についてまとめたものではベインズの「エジプトにおける王権の起源（Origins of Egyptian Kingship）」がよく知られています【Baines 1995】。ただし、両者とも出版から既に 20 年ほど経過していますので、先に述べた "Origins" など、最新の議論や調査情報などをあわせて入手することが必要となります。他には、展覧会のカタログも研究の現状や進行中の調査の様子を知る重要な資料となります【Patch 2011; Teeter (ed.) 2011】。そして近年では、エジプト史全般に関わる重要な書物が幾つも出版されていますので是非チェックしてみて下さい【Engel 2013; Hornung, Krauss, and Warburton 2006; Lloyd (ed.) 2014】。さらには、この後お話をされる河合先生が、最近早稲田大学の『エジプト学研究』で、エジプト学の基本的な、非常に重要な書籍を時代や分野別にまとめて紹介して下さっており、非常に有用です【河合 2016】。そういったものもどんどん活用されていくことを強くお勧めします。職業柄、体内時計が 90 分で動いているために本日は 60 分という非常に短い時間でいささか話を詰め込みすぎた感がありますが、以上で私の話を終わらせて頂きます。ご清聴有難うございました。

（以上は、当日の講演に一部加筆・修正したものです。「講演」という性格上、注にあたる部分は本文に反映させました。）

参考文献

Adams, B. 1988. Predynastic Egypt. Shire Egyptology 7, Princes Risborough.

Adams, B. & Cialowicz, K. 1997. Protodynastic Egypt. Shire Egyptology 25, Princes Risborough.

Autuori, J. C. 2002. "Back to the Mastaba Tombs of the First Dynasty at Saqqara. Officials or Kings?" Egyptological Essays on State and Society. (ed. by Pirelli, R.): 27-61. Serie Egittologica 2. Napoli.

Baines, 1995. "Origins of Egyptian Kingship." In: Ancient Egyptian Kingship (eds. By O'Connor, D. and D. Silverman). E. J. Brill.

2013. High Culture and Experience in Ancient Egypt. Equinox.

Bard 2000. "The emergence of the Egyptian state," In: The Oxford history of ancient Egypt (ed. by I. Shaw). Oxford. pp. 61-88.

Bestock, L. 2007. "Finding the First Dynasty Royal Family." (eds.), The Archaeology and Art of Ancient Egypt (eds. by Hawass, Z. and Richards, J.). ASAE 36. I: 99-108.Cairo.

2009. The Development of royal funerary cult at Abydos. MENES 6. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.

K. M. Ciałowicz 2007 "From residence to early temple: the case of Tell el-Farkha", In: K. Kroeper. M. Chłodnicki, M. Kobusiewicz, Archaeology of Early Northeastern Africa. In Memory of Lech Krzyżaniak. Poznań. pp. 917-934.

Dreyer, G. 1998 Umm el-Qaab I. Das prädynastische Königsgrab U-j und seine frühen Schriftzeugnisse. Philipp von Zabern, Mainz.

Edwards, I. E. S. 1971. "The Early Dynastic Period in Egypt" In: Cambridge Ancient History, 3rd edn. Vol. 1, pt. 2. Cambridge University Press, Cambridge. pp. 1-70.

Emery, W. B. 1938. Excavations at Saqqara: The Tomb of Hemaka. Cairo, Government Press.

1939. Excavations at Saqqara: The Tomb of Aha. Cairo, Government Press.

1949. Great Tombs of the First Dynasty, I. Cairo, Government Press.

1954. Great Tombs of the First Dynasty, II. London, Egypt Exploration Society.

1958. Great Tombs of the First Dynasty, III. London, Egypt Exploration Society.

1961. Archaic Egypt. (Penguin Books) Harmondsworth.

Engel, E-M. 2013. "The organisation of a nascent state: Egypt until the beginning of the 4th dynasty," In: Ancient Egyptian Administration (Garcia, J. ed.). Brill. pp. 19-40.

Frankfort, H. 1951. The Birth of Civilization in the Near East（三笠宮崇仁監修 1962.『古代オリエント文明の誕生』岩波書店）. Indiana University Press, Bloomington.

Geodicke, H. 1988. "Zum Koenigskonzept der Thinitenzeit." SAK 123-141.

Gould, T. 2003. "A Study of the Relationship between the Different Dynastic Factions of the Early Dynastic Period and of the Evidence for Internal Political Disruptions." Aegyptiaca

Helvetica vol. 17: 29-53.
Heck, W. 1987. Untersuchungen zur Thinitenzeit. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
Hendrickx, S. 2008. "Les grands mastabas de la 1re dynastie à Saqqara." Archeo-Nil 18: 60-88.
Kaiser, W. 2008. "Zu überbauten Strukturen in den großen Nischengräbern der 1. Dynastie in Sakkara." Menes 5: 353-36. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
1990. "Zur Entstehung des gesamtägyptischen Staats," MDAIK46: 287-99.
Horning, E., R. Krauss, and D.A. Warburton (eds.) 2006. Ancient Egyptian Chronology. Handbook of Oriental Studies 83. Brill.
Kemp, B. J. 1966. "Abydos and the royal tombs of the First Dynasty" JEA 52: 13-22.
1967. "The Egyptian 1st Dynasty Royal Cemetery" Antiquity 41: 22-32.
1968. "The Osiris Temple at Abydos" MDAIK 23: 138-155.
1989. Ancient Egypt - Anatomy of a civilization. Routledge.
Köhler, E. C. 2008a. "Early Dynastic Society at Memphis." Menes 5: 381-400. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
2008b. "The interaction between and the roles of Upper and Lower Egypt in the formation of the Egyptian state: Another review." In: Egypt at its origins. vol. 2. OLA 172. Peeters, Leuven. pp. 515-543.
Lacher-Raschdorff, C. M. 2014. Das Grab des Königs Ninetjer in Saqqara: Architektonische Entwicklung frühzeitlicher Grabanlagen in Ägypten. Archäologische Veröffentlichungen 125. Otto Harrassowitz.
Lloyd, A. (ed.) 2014. A Companion to Ancient Egypt. Wiley Blackwell.
Martin, G. T. 2007. "The Early Dynastic Necropolis at North Saqqara: The Unpublished Excavations of W. B. Emery and C. M. Firth." CASAE 36: 121-126.
2008. "The Stela and Grave of Merka in Saqqara North." Zeichen aus dem Sand (eds. by Engel, E-M., Mueller, V. und U. Hartung). MENES 5: 463-476. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
Midant-Reynes, B. 2000. The Prehistory of Egypt. From the First Egyptians to the First Pharaohs. (translated by Shaw, I.) Blackwells, Oxford.
Morris, E. F. 2007. "On the Ownership of the Saqqara Mastabas and the Allotment of Political and Ideological Power at the Dawn of the State." The Archaeology and Art of Ancient Egypt I: 171-190. Cairo.
Nakano, T. 1998. "Abydos Ware and the Location of the Egyptian First Dynasty Royal Tombs." ORIENT XXXIII: 1-32
2000. "An Undiscovered Representation of Egyptian Kingship?- The Diamond Motif on the Kings'Belts" ORIENT IIIV: 23-34.
O'Connor, D. 2005. "The Ownership of Elite Tombs at Saqqara in the First Dynasty." Studies in

Honor of Ali Radwan (eds. by Hawass, Z. , Bedier, S., and Daoud, K.). SASAE 34. II: 223-231. Cairo.
2009. Abydos – Egypt's First Pharaohs and the Cult of Osiris. Thames and Hudson, London.
O'Connor, D. and D. Silverman 1995. "Introduction," in Ancient Egyptian Kingship (eds. By O'Connor, D. and D. Silverman). E.J. Brill.
Regulski, I. A Paleographic Study of Early Writing in Egypt. OLA 195. Peeters, Leuven.
Patch, D. 2011. Dawn of Egyptian Art. Metropolitan Museum of Art, New York.
Spencer, A. J. 1979. Brick Architecture in Ancient Egypt. Aris and Phillips, Warminster.
Stadelmann, R. 2005. "A New Look at the Tombs of the First and Second Dynasties at Abydos and Sakkara and the Evolution of the Pyramid Complex." In: K. Daoud, S. Bedier, and S. Abd El-Fatah (eds.), Studies in Honor of Ali Radwan 2. Cairo. pp. 361-375.
Tavares, A. 2005. "Saqqara, North, Early Dynastic Tombs." In: Archaeology of Ancient Egypt, Routledge. pp. 700-704.
Teeter, E. (ed.) 2011. Before the Pyramids – The Origins of Egyptian Civilization. Oriental Institute Museum Publications 33. The Oriental Institute of the University of Chicago.
van den Brink, E. C. M. and Levy, T. E. (eds.) 2002. Egypt and the Levant – Interrelations from the 4th through the Early 3rd Millennium B. C. E. Leicester University Press, London and New York.
Van Wetering, J. 2004. "The Royal Cemetery of the Early Dynastic Period at Saqqara and the Second Dynasty Royal Tombs." Egypt at its Origins – Studies in Memory of Barbara Adams. (eds. by Hendrickx, S. et al.) OLA 138. Leuven. pp. 1055-1080.Wengrow, D. 2006. The Archaeology of Early Egypt. Cambridge University Press.
Wilkinson, T. 1999. Early Dynastic Egypt. Routledge, London and New York.
2000. Royal Annals of Ancient Egypt. Columbia University Press, New York.
2014. "The Early Dynastic Period." In: A Companion to Ancient Egypt (ed. by A. B. Lloyd), Wiley Blackwell. pp. 48-63.
河合望 2016.「埃及学指南のための覚書」『エジプト学研究』第 22 号 . pp. 205-227.
近藤二郎 1997.『エジプトの考古学』同成社 .
古代オリエント博物館 1992.『古代オリエント博物館－文明の起源を探る－』古代オリエント博物館 .
白井則行 1994.「エジプト初期王朝時代の "Talbezirk" について」『遡航』第 12 号 . pp. 69-87.
1996.「初期王朝時代のサッカーラとメンフィス」『エジプト学研究』第 4 号 . pp. 88-105.
高宮いづみ 2003.『エジプト文明の誕生』世界の考古学⑭　同成社 .
中野智章 1996a「エジプト第 1 王朝の王墓地比定に関する一試論 - 輸入土器からの視点」『オリエント』39-1: 19-40.
1996b.「エジプト第 1 王朝におけるパレスティナ土器の型式編年研究」『南山大学大学院

考古学研究報告』 第 7 号 . pp. 1-48.
2001.「セレクの誕生」『西南アジア研究』No. 54. pp. 1-22.
2003a.「王の埋葬はエジプトの初期王権について何を物語るか」古代学協会編 『古代王権の誕生』III 中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ編、角川書店 . pp. 228-244.
2003b.「王像に描かれた王の独占文様」『古代エジプトの歴史と社会』屋形禎亮編、同成社 . pp. 61-75.
2004.「サッカーラ 3505 号墓と雄牛頭部模型－第 1 王朝期墓地研究への手がかりを求めて」『西アジア考古学』第 5 号 . pp. 107 － 118.

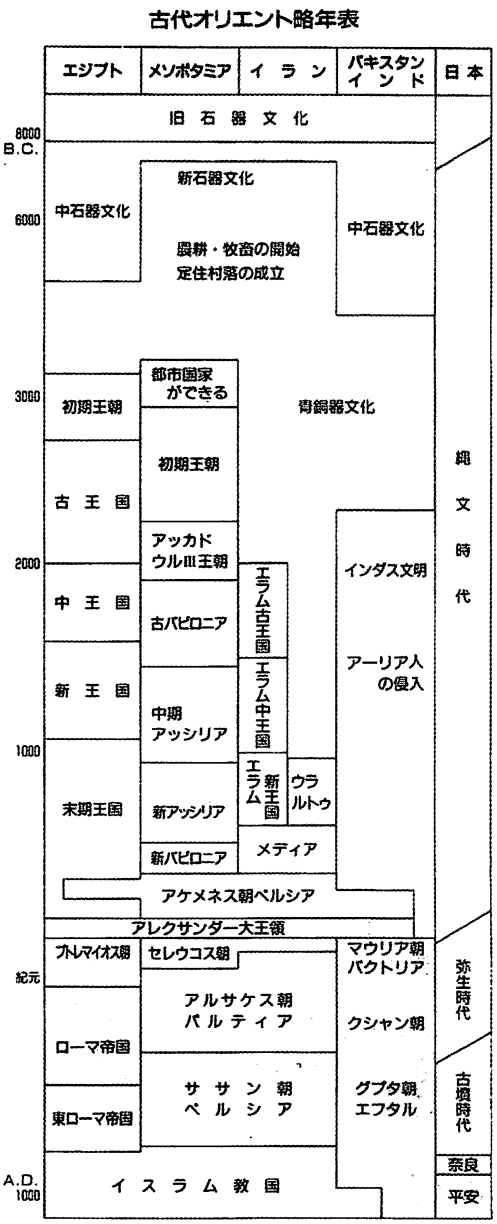

図1　古代オリエント略年表
【古代オリエント博物館 1992: 7】

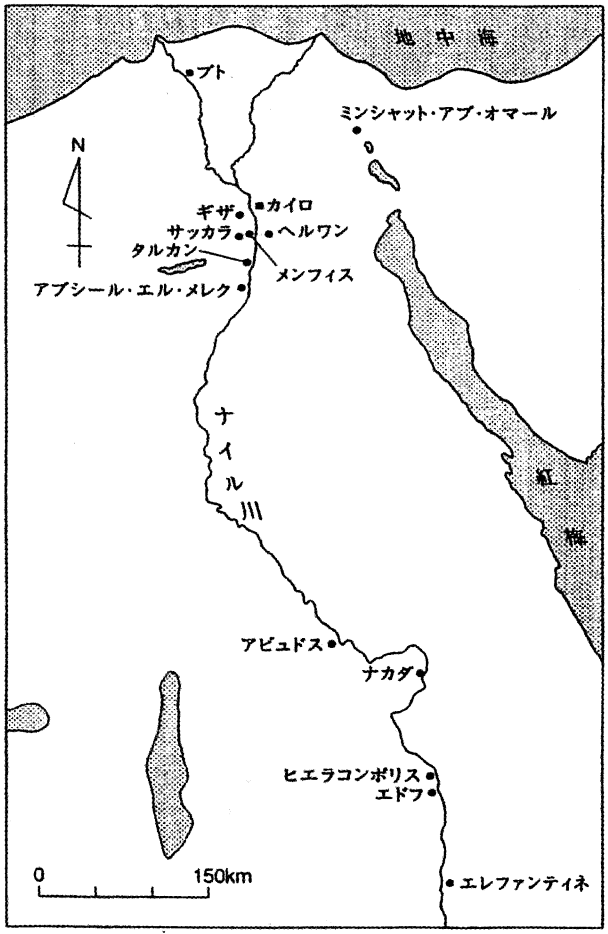

図2　エジプト国家形成期主要遺跡図
【中野 2003: 228- 図 1】

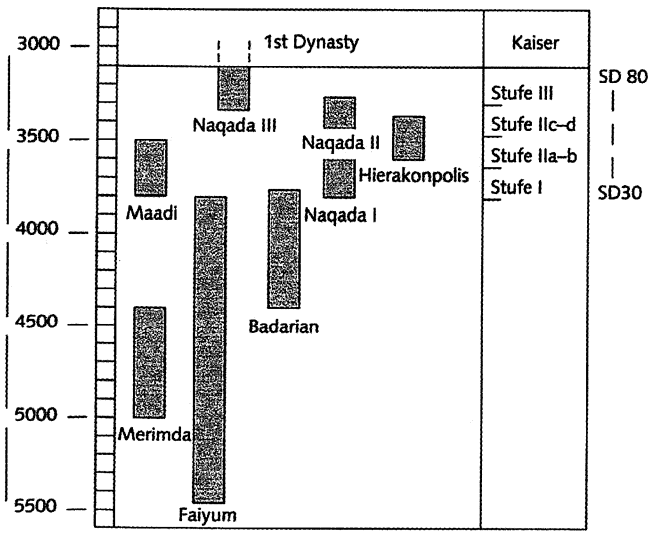

図3　ピートリとカイザーによる先王朝時代区分
【Midant-Reyne 2000: 264-Chart 3】

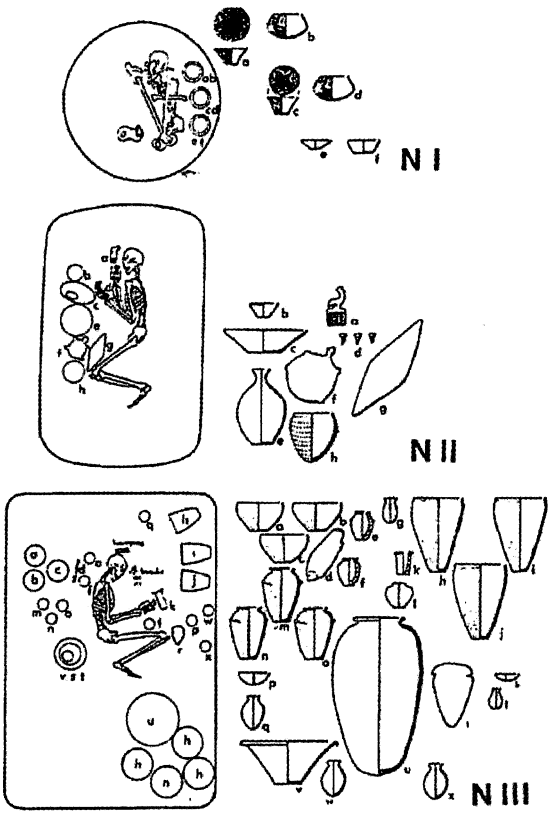

図4　ナカーダ文化期の墓と副葬品
【Adams 1988: 16-Pl. 4】

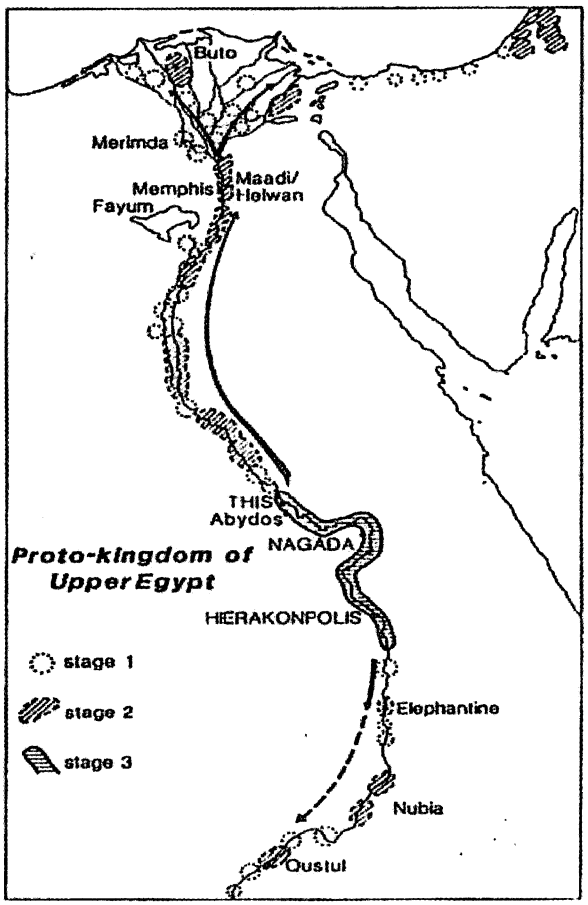

図5　上下エジプトの統一過程予想図
【Kemp 1989: 45-Figure 13】

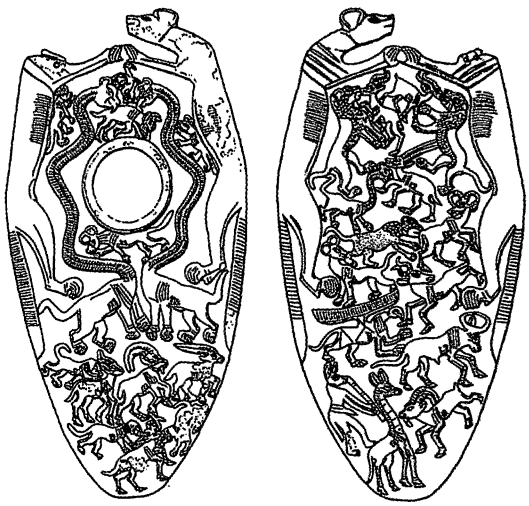

図6　ヒエラコンポリス「主要埋納物」出土の
2匹の犬のパレット
【Wengrow 2006: 180-Figure 9.3】

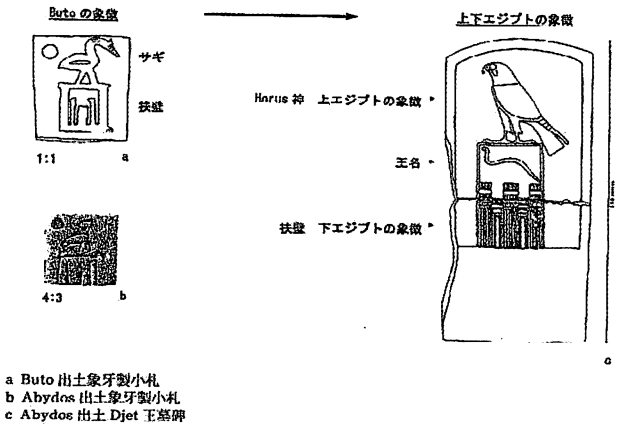

図7　セレクの誕生過程予想図
【中野 2001: 14- 図 4】

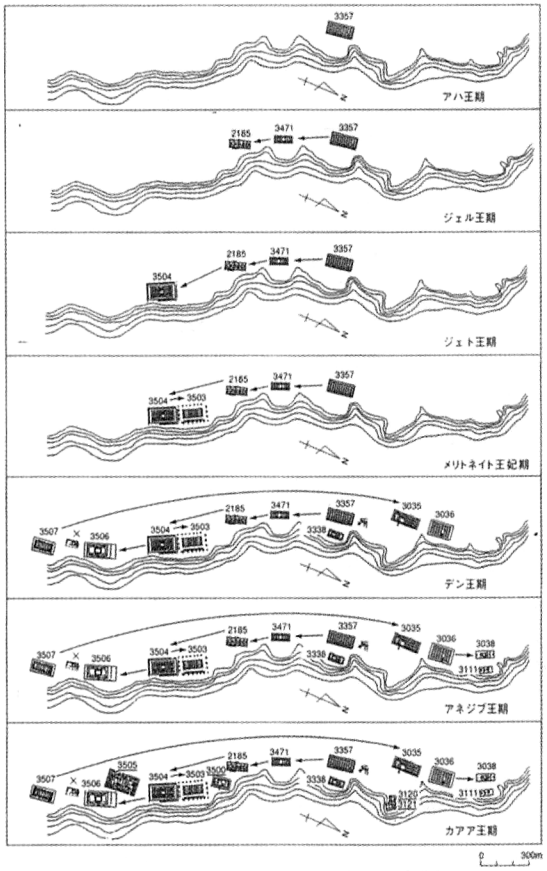

図８　第１王朝のサッカラ墓地形成図
【中野 2003: 233- 図 3】

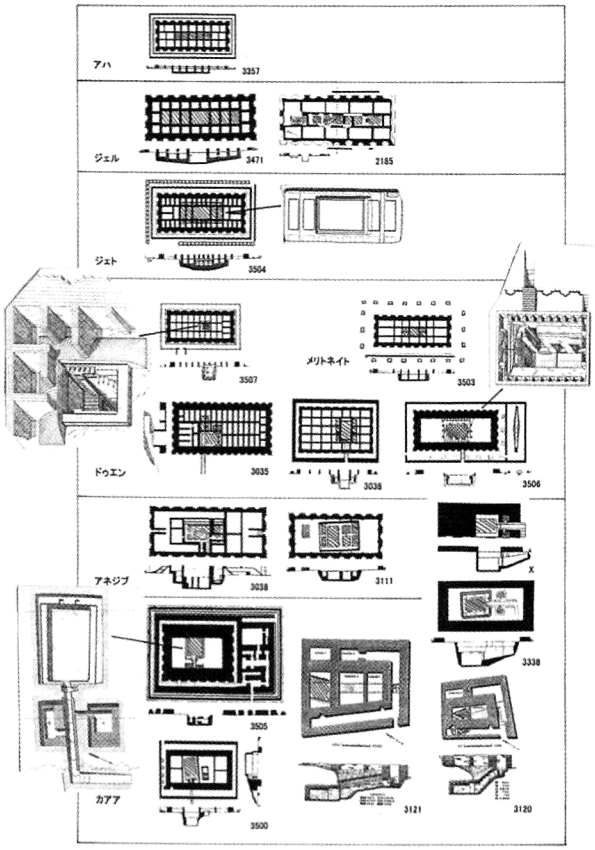

図９　サッカラ墓地の墓：上部構造の変遷

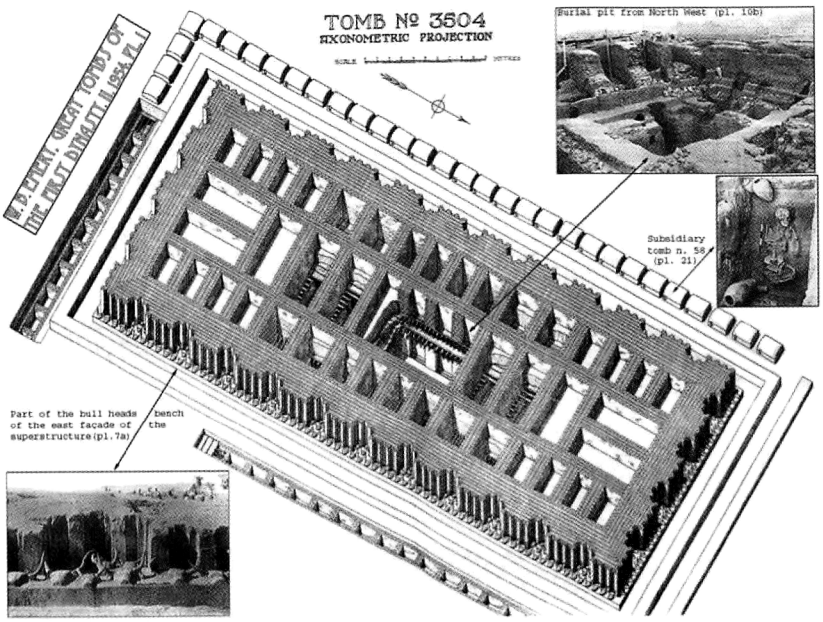

図10　サッカラ３５０４号墓復元図
【Raffaele, F. Late Predynastic and Early Dynastic Egypt (http://xoomer.virgilio.it/francescoraf/hesyra/egypt/S3504.jpg)】

比定王期（出土王名）	墓番号	王期比定資料	ほかの出土人物名（太字はほかの王名）	上部構造規模（m）	部屋数（上部／下部）	付属墓
アハ	*S3357*	封泥、ラベル	なし	48.22×22.00	27/5	0
ジェル	S2185	封泥	なし	42.00×16.10	19/7	0
	S3471	封泥	なし	41.20×15.10	29/7	0
ジェト	*S3504*	封泥、ラベル、杖	セケムカセ、**デン**、**カアア**	56.45×25.45	43/13	62
メリトネイト	S3503	封泥、石製容器	**ジェル**	42.60×16.00	21/5	20
デン	*S3035*	封泥、ラベル、鎹、石製容器	**ジェル**、ヘマカ、アンクカ	57.30×26.00	45/4	0
	S3036	封泥、石製容器	**アハ**、アンクカ	41.00×22.00	33/5	0
	S3506	封泥、石製容器	**ジェル**、ヘマカ、アンクカ、メジェドゥカ、セトカ、カニ、メセンカ	47.60×19.60	24	10
	S3507	封泥、土器	**カアア**、セクカ、王妃（不明）のタイトル	37.90×15.85	30/2	0
	X	封泥	なし	26.00×12.00	0/3	0
	S3111	封泥	**アネジブ**、サブ	29.25×12.10	0/7	1
アネジブ	*S3038*	封泥、バッグ	**デン**、アンクカ、ネブトゥカ	37.00×13.85	0/1	0
カアア	*S3505*	封泥、石製容器、石碑	スネフェルカ、メリ、メルカ、ネフェルメリブ、ケレブカ、セトカ	35.20×24.30	0/3	1
	S3500	封泥	なし	31.90×15.90	5/13	4
	S3120	封泥	なし	13.20×10.00	3/1	0
	S3121	封泥	なし	19.10×13.60	4/1	0

注：下線＋イタリックで記した墓はエメリーのいう王墓

表１　サッカラ墓地出土人物名一覧
【中野 2003: 231- 表 1】

王　期	墓	立地	規模（m）	主壁龕の数	主壁龕と副壁龕の割合	主壁龕の型	主壁龕最大幅	主壁龕最大奥行	副壁龕最大幅	副壁龕最大奥行	主壁龕付属物
アハ	3357	起点	48.22×22.00	24	1：3	A	2.05	1.20	0.95	0.25	柱穴
ジェル	2185	南	42.00×16.10	24	1：3	A	不明	不明	不明	不明	柱穴
	3471	南	41.20×15.10	24	1：3	A	2.10	1.10	0.50	0.25	なし
ジェト	3504	南	56.45×25.45	30	1：3	A	2.00	1.10	0.45	0.25	牛模型
メリトネイト	3503	南	42.60×16.00	24	1：3	A	2.13	1.10	0.45	0.25	柱穴
デン	3035	北	57.30×26.00	40	1：3	A	1.60	1.20	0.39	0.16	なし
	3036	北	41.00×22.00	24	1：3	B	1.90	0.65	0.40	0.25	なし
	3506	南	47.60×19.60	36	1：3	A	1.75	1.05	0.35	0.20	牛模型
	3507	南	37.90×15.85	22	1：3	B	1.90	0.80	0.50	0.30	牛模型
	X	南	26.00×12.00	0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
アネジブ	3038	北	37.00×13.85	24	1：3か2：3	B	1.75	0.70	0.48	0.24	なし
	3111	北	29.25×12.10	22	1：3か2：3	B	1.75	0.85	0.48	0.25	なし
カアア	3505	南	35.20×24.30	24	1：3か2：3（除西面）連続（西面）	B	1.93	0.83	0.39	0.28	牛模型
	3500	南	31.90×15.90	1	1：3	A	不明	不明	不明	不明	なし
	3120	北	13.20×10.00	2	1：1	B	1.07	0.55	0.75	0.55	なし
	3121	北	19.10×13.60	2	1：1	B	1.10	0.50	0.60	0.50	なし

表２　サッカラ墓地各墓の壁龕構造
【中野 2003: 235- 表 2; 図 4】

A [redacted]

B [redacted]

２種類の壁龕構造